

# 賑やかな食卓

NOIF  
project

vol.3

フローリングは窓越しの陽射しを受けて暖かい。お尻をつけて坐り込み、爪を切る。裸足の両足で開いた本を押さえ。足裏に乾いた紙の感触。指の形に沿って爪切りを動かしてゆくと、弓形に切られた爪がぽつんと頁のあいだに落ちる。一枚爪を切るたびわたしは頁をめくる。

ふいに名前を呼ばれて顔を上げた。彼だ。爪を切っているの。ううん。本を読んでいるの。ううん。

それきり彼は困った顔をして黙り込んだ。本当に訊いてほしいことを彼は訊かない。わたしもまた黙り込み、爪を切る作業を再開した。一枚切る、頁をめくる。切る、めくる。切る。めくる。切る。彼の視線はずっと、うなだれた頸筋に感じている。

すべての爪を切り終わればわたしは本を閉じて彼の前に立つ。明日仕事に行く電車のなかで読んでみて。とても面白い本だから。わたしは猫撫で声で本を彼の胸に押しつける。あいだに挟まった爪が頁を貫き、ちくりと彼の胸をも貫く、そんな妄想を抱く。そう、それは本当に莫迦げた妄想だ。けれども確かに彼は、痛みを堪えて顔を顰めた。

闇の中で、微かな呼吸音が聞こえる。

卓子の上の水差しが喘いでいた。

すっくと立つシンメトリーの緊張感、そしてセラドンの禁欲的な色彩が、空間を静謐に切り取っている。

しかし、よくよく見ると、すらりと柔らかい稜線を描く首筋が、妙に扇情的に感じる。釉薬の下の陰刻も、乙女の柔肌を走る血管のようで、ひどく生々しい。

水差しが喘いでいた。

瀟洒に括れた小さな水差口から、すうつ、はあ……、すう、はあ……と、吐息が細く長く滴っている。それは重く、病的な臭気を孕んだ吐息だった。

酷い胃病を患った人間の口臭に酷似している。過剰に分泌された消化液が、胃壁を爛れさせる臭いだ。

幾星霜も身の内に抱えた虚無が変質し、どろりどろり、水差しの内面を侵食している。

水差しは苦痛に身悶えすることもできず、ただ諾々と、饞えた病臭を吐き出し続けていた。

すうつ……はあ……。

不意に、呼吸音が深くなった。

周囲の闇に、より一層、濃い病臭が混じったかと思うと、釉薬に濡れた水差しの表面が、ぬらり、輝きを増したような気がした。

「渦潮に飲み込まれたい」

と、隣の女の子が言う。

学校で瀬戸内海の渦潮の話聞いた、その日の帰り道だった。そんなのダメだよ、死んでしまうよ、としか僕は言えなかった。

けれども、隣の女の子は僕の声は聞こえなかったようで、渦潮渦潮と繰り返して呟いていた。

次の日、隣の女の子は、自由帳にぐるぐると渦巻きばかり描いていた。

さらに次の日、プールの時間に自由帳を大事そうに抱えていた。先生に、自由帳は置いていきなさいと言われても離さなかった。準備体操をしている最中に、隣の女の子は自由帳を抱いたままプールに飛び込んだ。プールの水ははぐるぐると渦を巻き、隣の女の子もぐるぐると渦に巻かれていた。凄い轟音。

そのうち女の子は渦の中心に沈んでいき、プールは静かになった。プールの中に、隣の女の子はいなかった。

準備体操が終わって、プールに入る。もう少しで、五十メートル泳げるようになるんだ。

鉄格子の不揃いに切り取られた鉄棒が鉄琴に似ていることに気付いたのは、空を自由自在に飛ぶ夢を見た日の朝だった。

石室の冷たい床に素足で立つ。ほんの少し背を伸ばして窓の鉄格子を爪で弾くと、キン、と鈍い金属音がした。隣の鉄棒はさっき弾いたものより少し短く、同じく鳴らしてみると甲高い音がした。B♭だった。

私は歌を歌える。

背筋が凍えるような、それは確かで静かな興奮だった。潰れた声帯を私だけの楽器に再生させ、日なが一日私は私の歌を無人島の空一杯に響き渡らせる。

僕と彼女は二十フィートのテーブルを挟んで向かい合い、食事をする。

音が消えた。何の前触れもなくぷつぷつと。

世界から音が消えたとき、世界中が混乱に陥った。これはどこぞの国の陰謀だ、いや宇宙人だ、という議論があちこちで巻き起こった。ただし筆談で。他にも窃盗が横行したり、蝙蝠がふらふらと住宅街を飛んだりする。世の中は静かに大いに狂っていった。

音が消えた半月後、匂いが消えた。やはり何の前触れもなく。

思い立って外に出る。天気が良いから気晴らしに公園まで散歩するのだ。それでもふとした拍子に考えてしまう。次は何が消えるのだろうか。その答えはベンチで飲み物を飲んでいるときに得る。味覚だった。気付いたらお茶は冷たいだけの何かに変わっていた。

僕は公園を飛び出し辺りを見回す。都心の方から空が色を失っていくのが見える。雲の白でさえも色彩を失い、のっぺりとした白黒の膜が空と地面を覆っていく。瞬く間に僕も飲み込まれ、まだ色彩の残る方も駆け足に侵食されてゆく。それだけではない。その白黒でさえもすうっと薄らいで消えてゆく。煙が空に拡散するように、景色が溶けてゆく。そして自分自身もまた。

反射的に地に手を突き感触をまさぐる。手の平に食い込む小石の感覚を、重力の鎖を記憶するのだ。空に浮かんでしまう前に。

雪の降る静かな夜、一人の盲僧が、杖を片手に往来を歩いている。さくりさくりと、新雪を踏みしめる音が、冷え冷えとした闇に響いている。

盲僧が向かう道の先から、何やら雪の小山のようなものが姿を現した。まるで北海を流れる氷塊のように、ずっしりとした速度で、彼の方へと近づいてくる。

大きな体に、たっぷりと雪を積もらせた鯨だった。

盲僧は、こんな雪深い夜に出歩いているのは、全く己独りきりだと思い込んでいるのか、眼前に迫る巨体に気付く様子はない。

鯨の方はと言えば、こちらはよく心得たものらしく、道端にその身を寄せると、動きを止めた。盲僧が通り過ぎるのを待つつもりらしかった。

けれども、その盲僧があんまり悠々と往来の真ん中を歩いているものだから、彼の突く杖の先が、こつりと鯨の鼻先に触れる。

盲僧ははっとした表情になり、鯨に向けて「あいすみません。どうぞお先を」と頭を下げたきり、鯨とは反対の道端へと退いてしまった。彼もまた、姿の見えぬ相手をやり過ごそうと思ったらしい。

互いに道を譲りあつたまま動こうとしない。

歩みを止めた両者の間に、しんしんと、暗い空から降る雪が積もっていく。

先に動いたのは鯨の方だった。くりくりした小さな瞳を盲僧に向けながら、彼の脇を注意深げに通り過ぎる。

ようやく尻尾のあたりが、盲僧の横を通過し終えた刹那、その体に積もり積もった雪山が、ついに自重に耐えかねて、どさどさと往来に崩落した。

思いもかけぬ音と振動に驚いたらしく、盲僧の体がびくりと跳ねた。



ひどい不眠症の少年は、夜の森へ出掛ける。

「やあ」

「ホホウ」

梟の返事は、そっけない。だが、少年はそれを聞いて不思議と安心する。

「そっちへ行ってもいいかな」

「ホホウ」

少年はするすると木に登り、梟の隣に腰掛ける。

梟は大きい。森の住人の話をまとめると、梟は、この森の長老なのだそうです。

少年は梟に凭れかかり、スヤスヤと寝息を立て始める。

梟は、しばらくそれを聞いたあと、おもむろに首をぐるりと回す。

静かだ。それから少年を啜えて、羽を目一杯広げると、雲に向かって飛び立つ。

少年はもう、ベッドで眠れぬ夜を過ごさなくてもよい。

古星の消滅を見守る宇宙船のコックピットで、

或いは、星降る夜のヒマラヤの山頂で、

砂漠の風に朽ちていく磨崖仏の螺髪の上で、  
内臓が縮むほど冷たく澄み渡った地底湖の水底で、  
ひっそりホームレスが凍え死のうとしている大都会の片隅で、  
無人電算室のサーバラックの物陰で、  
家人が出払った家の地下ボイラー室で、  
空っぽのまま虚ろに揺れる鳥籠の中で、  
しんしんと痛みを訴える虫歯の病巣で、  
時間を締め出した暗い自意識の小部屋で、

鉾質化した古い骸を抱きしめながら眠っている。

——ずいぶんながく眠っていたらしい。

目が覚めるともう放課後だった。教室には私を除いて誰もいない。

うっすらと授業の跡が見える黒板、その上にある埃を被ったスピーカー、わずかな隙間から吹き込む風に揺らめくカーテン。整然としているように見えて、実は少しずつずれている机たち。脇にぶら下げられた生徒の荷物は混沌としている。普段はそんなこと思いもしないのに。

時刻は16時半。運動部の掛け声や、吹奏楽部の無秩序な楽器の音が、耳を澄ましてみれば密やかに聞こえてくる。暮れなずむ光が汚れで黄ばんだカーテンを煌々と染め上げる。誰かが教室の前を通り、去っていく足音が。

午後の国語の授業はとても退屈で、ノートの端に書いた落書きにも飽きるといよいよ机にうつ伏せる。深く息をつく。クラスの生徒のほとんどが同じように机にうつ伏せ、起きているのは一部の真面目な生徒だけだった。チョークが黒板を叩くリズムは緩やかで、間のびした音読の声は低く耳に心地よい。来月はもうテストだっけ？ 夢現にカレンダーを思い出す。来年に迫った受験のことや、最近気になっている人のことや、仲間内でのくだらないトラブルのことや、全部頭の隅の隅のずっと彼方に追いやって、ただただ食後の気だるい午睡を貪った。不意に出た欠伸を噛み殺し、にじんだ涙を裾で拭う。深く長く息を吐き、しみじみとこう思う。

いつか終わるのだろうか、この果てしない悪夢は。

日の当たるこの席は蒸し暑い。背中や膝の裏に浮かんだ汗はただちに制服に染み私を締め付ける。私の魂はここではないどこかを求めている、ずっと遠くへ行きたいと望んでいるけど、肥え太った肉体に阻まれほんの少しだって飛べやしない。まだ小さかった頃には果てしなく広がって見えた世界は、球体であるとわかった日からただの檻だったのだと気付いた。誰かが決めたルールや規範に始まり肉体的限界まで、あらゆるものが私のできることとできないことを区別していく。私は、その様子を現在進行形で目のあたりにしている。幼い頃に憧れた未来を実現できた大人はどれだけいるものか。私たちは抗い方を知らない、叫び方を知らない、そもそも私たちの敵を知らない。間のびした音読の声が、直近のスケジュールが、気だるい午睡が、緩やかに私を私と規定する。ずるずると私は眠りの底に引きずられていく——。

ぐっと伸びをして、机に爪を立てる。今は不思議と体が軽い。私は足取り軽やかに机を駆けると、わずかに開いた窓から箱庭みたいな教室から逃げ出した。ながい悪夢を見ていた気がする。

(透明な猫はいなくなった。ところで空っぽの教室を眺めているのはだれ?)

教授が講義のために教室へ入ったとき、その広い空間には女学生が一人居るきりだった。教室の前からも後ろからも、そして教授からも適切な距離を保って、女学生はぼつねんと椅子に腰掛けていた。教授は日常的に生徒らから蔑まれていたので、その状況を特別不思議に思うことはなく、果たして講義は開かれた。

女学生は白く眩しいセーラー服を身につけていて、あきらかにこの学校の生徒ではなかった。どこからか忍び込んできて気まぐれに教授の講義に出席したのだろう。教授はいかなることにも訓練されていたので、講義は滞ることも中断されることもなかった。

教授はだいぶん歳だった。何年か前に自宅で倒れて救急車で運ばれて以来、口元に少し麻痺があり、ときどき言葉がうまく喋れない。

何の弾みだったのか、ふいに、女学生がくしゃみのような笑いを漏らした。教授は初めて講義を中断した。まじまじと女学生を見、白く眩しいセーラー服を見、何かとても大切なことに気がついたように大きく口を開いた。そのとき、教授の麻痺の残る口の端から、ぽろりとワードがこぼれ落ちた。

「あ」と声を上げ、教授は安堵した。こぼれ落ちたワードに「あ」は含まれていなかった。

教授の口からこぼれたワードはころころと女学生の足下へ転がり、爪先にぶつかって止まった。女学生は自分の足下に転がってきた、教授の口からこぼれたワードを拾い上げると、べろっと出した舌の上に乗せて嚙下した。白い喉が蠕動した。それからにっこりと教授に笑いかけると、ドアを開けてそのまま廊下の向こうへ消えてしまった。

「、」女学生を呼び止めようと教授は口を開いたが、その口からはもはや多くのワードが奪われていて、ひゅう、と、気道から息の漏れる音がするだけだった。

## 賑やかな食卓

<http://p.booklog.jp/book/39012>

著者：NOIFproject

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/noifproj/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39012>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39012>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.